琉球病院 Monthly

独立行政法人
国立病院機構　琉球病院
National Hospital Organization RYUKYU Hospital

特別号
2014.July

発行者　琉球病院事務部長
吉永　可公

院長離任のご挨拶

独立行政法人国立病院機構榊原病院
院長　村上優（前琉球病院院長）

7月1日をもって榊原病院（三重県津市）へ異動しました。琉球病院に来て8年が過ぎましたが、在職中は関係各方面にお世話になり感謝いたします。

琉球病院に赴任をした時からみれば、病院は大きく変化をし、さらには平成27年5月よりは新精神科病棟と認知症病棟、11月には重度心身障害児者病棟、28年5月にはリハビリテーション棟が次々に竣工して、新しい病院が軌道に載る道筋をつけて退任できたことは、個人的にも幸運だったと思います。今後の琉球病院の医療活動が沖縄県、さらに我が国の精神科医療の発展に寄与できることを願っています。

目を閉じれば平成18年7月1日に琉球病院へ着任したときのことを、昨日のことのように思い出します。医療観察法を中心に医療を整えようと思いましたが、どこから手を付けるか戸惑うほどに山積した問題がありました。軌道に載り始めたのは平成19年医療観察法病棟がスタートし、多職種チームの芽が出て、専門医療の萌芽としてアルコール医療が整い始めたころでしょうか。外来診療活動、医療連携室を含めた地域精神科医療の支援体制の再編、それが多様なデイケアや訪問看護につながり、治療抵抗性精神科疾患へのmECTやクロザピン導入、こども心療科と命名した発達障害や情緒障害治療の児童思春期精神医学、認知症への医療体制、包括的地域精神医療ACTがスタートしました。平成22年4月1日に、芽が大きく育ち活気ある病院体制に躍り出ました。その後は医師をはじめとする多職種の若手スタッフによる新たな精神科医療を求める活動が今日まで続いています。医療観察法は鑑定から入院・通院施設までが整い、多くの見学や視察者の評価を得て医療観察法モデル医療を目指しています。アルコール依存は早期介入を県立中部病院で始めたアルコール相談による介入、今帰仁村での特定健診と連動した介入、その後は那覇などの都市圏から、宮古市の離島、更には北大東や多良間島などの離島まで様々な形で早期介入に協力し、長寿県復活に向けた県の取り組みをサポートしています。クロザピンは113例を超えてクロザピンによる臨床のメッカとなりました。これから長期予後をモニターして治療抵抗性統合失調症の回復という困難な問題解決への貢献をしたいと体制を整えつつあります。本格的な児童思春期精神科医療を沖縄で育てようと始めた、こども心療科も軌道になりました。まだ関係機関との有機的な連携によるサポートシステムなど専門性や継続性を高めていきます。入院から地域へも田舎型のACTなど、人口集積をしていない北部地域医療活動のモデルを是非全国にアピールしていきます。都市では有効ですが、医療資源が疎な田舎でもACTは有効だという認識を持っています。次々に課題が見えてきます。「峠に着けば、また向こうに峠が見え」ということでしょうか。3.11でのこころのケアチーム体験からDPATも院内に作り災害に備えています。「災害医療センター」や「災害時こころの情報センター」の指導も仰ぎ我が国を代表するチームを目指しています。

本当に夢を現実にする力を琉球病院に感じました。一人一人のスタッフの力は日本一とは言えませんが、多職種チームで課題を乗り越えていく姿には感動を覚えます。琉球病院の一員として誇りを感じつつ去ることができました。

こんな琉球病院も「常にある病院」ではなく、多くの協力を得ながら「常に作られつつある病院」です。努力やエネルギーを注いでこそ成り立つ病院です。これからも明日の精神科医療を目指して機能することを祈っています。お世話になりました。

院長就任のご挨拶

独立行政法人国立病院機構琉球病院
院長　福治康秀

この度、村上院長の後任として7月1日付で院長に就任しました。今後ともどうぞよろしくお願いします。

私は、那覇市で生まれ、首里中、首里高と進み、琉球大学医学部を卒業しました。そして琉球大学精神科で医師の研鑽を積んできました。沖縄で育ち、沖縄に育てられてきたと思います。平成21年には、縁あり琉球病院に赴任しました。ちょうど5年になります。琉球病院では、一般精神医療を中心に多岐にわたり携わっています。診療の幅がさらに広がったと思います。今回の就任を機に、さらに沖縄の精神医療、引いては日本の精神医療のために頑張ってゆきます。

琉球病院では専門医療が育ってきております。治療抵抗性精神疾患治療（クロザピン・修正型電気けいれん療法（m-ECT）など）、アルコール・薬物等の依存症治療とアルコール依存症早期介入、包括的地域精神医療（Ryukyu-Assertive Community Treatment（R-ACT））、児童・思春期精神医療（こども心療科）、重度心身障害児（者）医療（動く重心）、司法精神医学（医療観察法、司法鑑定）、認知症などです。また、今年度、「思春期・青年期こころのリスク外来」を立ち上げました。こころのリスク状態を早期に発見し支援してゆきます。これらの専門医療で地域のニーズにかなり応えられるようになってきたのではないでしょうか。今後も、地域のニーズを捉えつつ専門医療をさらに充実してゆきたいと思います。専門医療を支えている土台には多職種チームがあります。琉球病院の多職種チームの力を利用されてはいかがでしょう。きっとお役にたてると思います。このチーム力でこころを一つにして突き進んでゆきたいと思います。今後、精神科医療は入院から地域への移行と大きな変化を遂げてゆきます。その変化に、チーム力で対応してゆきます。そして、関連機関としっかりと連携してゆきます。どうぞよろしくお願いします。

琉球病院のもう一つの要は、人材育成です。教育・研修システムをさらに強化し、ともに成長し学びあえる場を提供してゆきます。

臨床研究部が立ち上がって2年になります。今回、業績集第2巻を刊行できました。今後も、より臨床に即した臨床研究を進めてゆき、臨床から見えてくる新しい知見を発信してゆきます。

この度、当院が災害派遣精神医療チーム（DPAT）の指名を受けました。災害時に現地へ迅速に入ってゆく精神医療チームの事です。これまでの災害支援の経験を生かしチームを作りあげ貢献します。

建物の建て替えが始まりました。一般精神病棟、認知症病棟、重度心身障害児（者）病棟、作業療法棟の建て替えが進んでゆきます。建て替えに伴い、外来エリアも改修を行います。さらにアメニティーを上げ、医療を受ける皆さんがさらに快適で質の良い医療が受けられるよう努力します。

琉球病院は新たなステージへと進んでゆきます。今そのための準備を進めているところです。今後の琉球病院にご期待ください。

新任の院長も副院長も、まだ経験は浅く至らないところも多々あると思いますが、何事にも全力で頑張ってゆこうと思っております。地域のニーズにしっかりと応えてゆくのが我々の使命だと思っております。当院の理念である「この病院で最も大切なひとは治療を受ける人である」のさらなる実現を目指します。ご支援の程どうぞよろしくお願いします。

副院長就任のご挨拶

独立行政法人国立病院機構琉球病院
副院長　大鶴　卓

7月1日より琉球病院の副院長に昇任しました大鶴卓と申します。私は平成11年4月に初めて琉球病院で働かせていただき、精神科医としてのキャリアの多くは沖縄の患者さん、ご家族、支援者、職員から学ばせていただきました。私を育ててくれた琉球病院で責任ある役職で仕事ができることは誇りであり、全力で頑張らせていただきます。

私は現在、医療観察法病棟医長として働いており、この8年間に渡り「精神障害に罹患し、かつ重大な他害行為を行った患者さんが円滑に社会復帰できるためにはどうすればよいか」を考えながら日々の臨床に取り組んでいます。それを重ねる中で、各専門職が高い専門性を発揮し、同時に治療の主体である患者さんを中心とした多職種チーム医療を行い、地域の方も含めた支援体制を整えたら、どんな患者さんでも必ず社会復帰できると確信できるようになりました。社会復帰のゴールは病院を退院することではありません。地域で患者さんが主体的に治療を受けながら、悩みを共有できる仲間、相談できる支援者を持ち、その人らしい有意義な価値ある人生を楽しめることが何より大切だと教えていただきました。そのような医療を琉球病院で提供することが私の理想です。琉球病院には多くの信頼できる仲間がおり、この理想は必ず実現できると信じています。

通院・入院されている患者さんとそのご家族、当院に関係する地域支援者の方々、近隣住民の皆様、働く職員に支えられ琉球病院は存在できます。当院を支えていただいている方々への感謝の気持ちを忘れず、患者さんとご家族が生活者として有意義に生きていくことを支える病院になるために副院長として全力を尽くして参ります。私は41歳で経験や知識が乏しい面があるため、分からないことは積極的にみなさんに尋ねていこうと決めています。その際はご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。